

「ものゆかしがり」する心

—— 狭衣の設定・異文・引歌にかんする覚書 ——

西 耕 生

理性は不可欠でありながら、
しかもつねに不十分である。

（白井晟一）

はじめに——本稿の概要

偶然目にした女君たちの姿に惑乱してしまふような夕霧の常態を、「例はものゆかしからぬ心地」と叙する源氏物語野分巻。形容詞に冠せられる接頭辞モノが漠然性を表わすとする通説に基づいて、現在、「ものゆかし」もその一つに数えられている。

もつとも「ものゆかし」を基とする動詞の場合、その接頭辞モノにはむしろ対象の存在を示せうとする傾向が著しい。物見高い女房を主語とする動詞「ものゆかしがる」が、盛装する麗人や稀代の盛儀など、五感に強く訴える事柄を対象にとる例がその典型となる。源氏物語若菜下巻に「ものゆかし

がり」と作る別本系の異文をも慮れば、これら用例の接頭辞モノは、当面する事物事象に寄せる好奇心の旺盛を語形として明示したものと把握される。

狭衣物語の、現存最古で鎌倉前期の書写にかかるという伝慈鎮筆本などに見える異文「ものゆかしがり」は、源氏物語玉蔓十帖において「まめ心」を逸脱しような夕霧像を、狭衣の主人公「二位中将」が的確に承ける一証と認められる。

そして、狭衣巻一の流布本に「男といふものは賤しきだに身のほども知らず人に心を付くるわざなめりかし」と作る本文が古歌を引き踏まえた修辭として捉え返されると同時に、相対的に素朴な印象を与える異本文をあらためて定位すべき地平が拓かれる。

一、「物ゆかしがりせぬ」男は無し——狭衣の設定

A. おしなへてミたりかハしき物ゆかしかりをそし給ハさ
りける。た、ひきすき給みちのたよりに、すこしゆへ

つきてミゆるやまかつのかきほのなてしこには、おのつからめとまらぬにしもあらぬほとに、おのつから、のをなつかしミたひねし給ところもあるにや、まめやかなりといひながら、いかてさたにおハせさらん。おとこといふものハあやしきたにいかなるもひとわたりものゆかしかりせぬものハなきよのさかなりける。まして……

〔伝慈鎮筆本狭衣卷一8ウ〕

〔狭衣物語諸本集成第三卷一二頁〕⁽¹⁾

A. をしなへてみたりかハしき物ゆかしかりなとハし給ハさりけり。た、ひきすき道のたよりにも……

……めとまらぬにしもあらねと……かほなつかしミ旅ねし給所もなきにや、まめやかなりといひながら、いかてかさたかにはおはせさらん。おとこといふ物ハ……いかなるもひとわたり物ゆかしかりせぬ……ハなき世のさかな……るを、まして……

〔紅梅文庫本さころも一5ウ〜6オ〕

〔狭衣物語諸本集成第五卷一頁〕

ここに掲げたのは、「二十にはいまふたつハかり」足らぬという主人公「二位の中将」の人となりを紹介する狭衣物語の一節である（以上、伝慈鎮筆本卷一6オに基づく）。現在広く読まれている本文でなく、異本二種を掲げた。ともに、吉田幸一博士の解説に拠れば、前者が「四卷一筆の現存最

古写本であることも、現存唯一の完本としても貴重である」
「鎌倉時代前期の書写本と見て、大過ないものと思う」と結論づけられるのに対して、後者は「近世初期の公卿と僧侶の筆になったことがわかる」伝本である。書写年代の隔たる両本には、相互に小さからぬ異同が見られるものの、その主旨はおおよそ同じい。

「おしなべて乱りがはしきものゆかしがり」をせぬ若公達であるがゆえに「まめやかなりといひながら」も、作中世界を動かすモチーフの常套としてはやはり、異性に対して関心を持つ主人公という設定が欠かせない。すなわち語り手が、「ものゆかしがりせぬ」「男といふもの」など無いのだという「世のさが」を持ち出してみせる所以である。

この「世のさが」という語は、卷三にも見える。ただし紅梅文庫本には用いられていない。

B. ……き、つ、人のおほくなりつ、うちわたりにハきこゑ、女院のへむにもいひいてけれハ、さふらふ人と、くちくにいゑは、さるへき人くこそいはね、まことならぬことも、た、かたハしたにいてくれは、まこと、いひなすことのミよのさかにて、そのあか月にさハいて給ひし、くるまのそこにたちたりし、そこものとミかうし、つまとよりいて給ひし、など、たちき、のよなくを、ほのかにミける人くもいとしのひいていひいた

しなどして、うちさ、めく人もあるへし。なへてのよにハ、としへにけるさまにさへつき／＼しくいひなす。女院にもまかせ給て、ないしのめのとをめして、かくあさましきことをよくいふなるハ、いかなることぞ。ミたてまつらぬをりハすくなくこそあれ、むげになににことを人のいふにもあらぬを、との給ハするに、いますこしめつらかに思ひはなれて、権大納言のの給けることをそかたりきこそさする。……〔伝慈鎮筆本卷三43オ〜44オ〕

俗に、火のない所に煙は立たぬ」というのが「世のさが」なのだと弁ずる草子地が配された、伝慈鎮筆本の一節である。主人公と一品宮との間柄を事ありげに吹聴する権大納言の話が、主人公の「立ち聞き（A）の夜な／＼をほのかに見」たという人々の噂も与かつて宮中に広まり、やがて一品宮の母女院の耳にまで届く。

B' ……聞きつく人はあまたになりつつ、内裏わたりにも聞こえ、院の辺にもやうやう言ひ出でければ、近う候ふ人々は、「あさましきことかな。かかるものまねびなせ」と、かたみに言ひ諫めけれど、まことならぬことも、ただ片端出でくれば、まことしうのみ言ひなす人多かる世のさがにて、その夜の暁に、さて出でたまひしこと、「御車（B）そこそここそ立てたりしか」「夜深う、その間の御格子、妻戸のあきたりしは、さにこそありけれ」など、折々の立ち聞き、垣間見のほどをほの見ける人々

「ものゆかしがり」する心

も、その折はなにと目もどめたまはざりしを、かかること出でて後は、忍びつつおのおの言ひ出しなどしてささめくもあるべし。

まして、なべての世には、年経にけるさまをつきつきしう言ひなすを、女院も聞かせたまひて、内侍の乳母を召して、「かく、いとあさましきことを世の中に言ふなるは、いかなることぞ。むげになきことをば人の言ふことにもあらぬを」とのたまはするに、いとあさましくなりて、この権大納言のたまひけることをぞ語り聞こゆるに……〔旧東京教育大学国語国文学研究室蔵『狭衣』

秋（新潮日本古典集成本下六九〜七〇頁）

右のようにやや委しく「折々の立ち聞き、垣間見のほど」と叙べるいわゆる流布本の本文も顧みれば、「まめやかな」主人公が「ものゆかしがり」する展開への起点となる巻一のA（A'）と、この巻三のB（B'）とは、相応する叙述だと考えてよからうか。異性にひかれる主人公のありようにふれるとき語り手は、「世のさが」を盾にして弁明する態度をとっている。

ところで伝慈鎮筆本では、「立ち聞き（A）の夜な／＼」を含んだ叙述Bに先立って、主人公が飛鳥井姫君の遺児（忍ぶ草）の消息知りたさに「垣間見」や「立ち聞き」を繰り返している様子が画かれていた。

a 女三のミヤをも一品のミヤになしたてまつらせ給へり。
 大将とのかゝる御うちすミにも、かのしのふくさハくしてや、とゆかしけれハ、さるへきおりハ、そのわたりをた、すミ給つ、かいはミもたえすし給なり。

〔伝慈鎮筆本狭衣卷三38ウ〜39オ〕

【校異】 かいはミもたえすし給なり

―けしきみ給けり（深川本・内閣文庫本）

―けしきミたまひけり（紅梅文庫本）

―気色を見給ひけり（古活字本）

β そのついても、さる人や、とおほかたなるやうにてとひ給ふに、たれとたしかにいはねと、よにしらすうつくしきさまをかたりきこゆるにも、あはれにおほされて、あなかななるたちき、もとら^アしきを、ミつくる人もあらハ、た、ミヤの御ためにぞ思ふへき。

〔伝慈鎮筆本狭衣卷三39ウ〕

【校異】 あなかななるたちき、―

―この御あたりのたちき、かいはみなと

（深川本・内閣文庫本）

―この御あたりのたちき、かいまみなと（紅梅文庫本）

―この御あたりの立ち聞き垣間見も（古活字本）

♪よふかくかへり給ふあか月に、やかて一条のミヤえおほ

するに、このミヤのミかといと、ふあきて……さらハ、しのふくさハひとりやのこり給覧、とおほしやるに、いとすきかたくて、れいの、やをらひり給ひぬ。つねのたちき、のくちにより給へれハ……

〔伝慈鎮筆本狭衣卷三40オ〕

【校異】 つねのたちき、のくち―

―つねのたちき、のとくち

（深川本・内閣文庫本・紅梅文庫本）

―常に立ち聞き給ふ戸口（古活字本）

β で「立ち聞きかいま見」と並記するような他の校異本文に比べ、「あながちなる立ち聞き」とだけ作る伝慈鎮筆本の場合、主人公の関心の高まりがこの前後で順序よく辿られていくかと思う。即ち、「かいま見も絶えずし給」（a）から「あながちなる立ち聞き」（ β ）を経て「常の立ち聞き」（ γ ）そうして「立ち聞きの夜なぐ」へと、自己本位に対象へ接近するにつれ徐々に昂じてゆく関心が、視覚のみならず聴覚へ、段階を踏んでいくというわけである。

ちなみに源氏物語には、「うちとけたる人のありさまかいま見など」（空蟬八八頁）^⑤、「け。近きほどの立ち聞きさせせよ」（末摘花二〇四頁）などと見えるほか、「世のさが」の語も用いられていた。

▽（人ノ命ノ）後れ先立つほどの定めなさは、世のさがと

見たまへ知りながら、(妻葬上トノ死別デ) さしあたり
ておぼえる心まどひは、類ひあるまじきわざになむ。

〔葵三二五頁〕

▽(光源氏が女人ヲ) かりにも見給ふ限りは……憎げな
く、我も人も情けを交はしつづ過ぐし給ふなりけり。そ
れをあいなしと思ふ人は、とにかくに変はるも、ことわ
りの世のさがと思ひなし給ふ。

〔花散里三九〇頁〕

▽あはれなること(死別ノ悲シミ)は、その常なき世のさ
がにこそは。いみじとても、また類ひなきことにやは、
と年積もりぬる人は、しひて心強うさまし侍るを……

〔柏木二二五六頁〕

「ことわりの」「常なき」といった限定も伴なつて、老少不
定や愛別離苦などが、此世の習い、世間の定め、の意で捉え
られている。仏教色を帯びたこのような「世のさが」に対し
て、「ものゆかしがり」や「ものまねび」に適用している狭
衣物語の場合、いわば世俗の慣らわしというほどの意で、よ
り一般的で広義の印象を受けるのは、作品をとりまく時代環
境のちがいに帰せられるのもあろうか。

本稿では、狭衣物語の主人公の性格づけに用いられた異文
「ものゆかしがり」を端緒に、少しく私按を述べてみたい。

二、「例はものゆかしからぬ心地」——野分巻の夕霧

源氏物語野分巻は、読み手が、作中人物である夕霧の視線
に導かれながら、六条院に住まう女君たちそれぞれの姿態に
接する一帖である。孝心篤く「うるはしくものし給ふ」彼
が、吹きすさぶ「風のさきにあくがれありき」見舞うのを契
機に、偶然かいま見した紫上の姿に囚らずも魅了されてし
まった我が心を、次のごとく省察する。

(夕霧) 中将、夜もすがら荒き風の音にも、すずろにも
のあはれなり。心にかけて恋しと思ふ人(雲居雁)の御
ことはさし措かれて、ありつる(紫上ノ)御面影の忘れ
ぬを、こはいかにおぼゆる心ぞ、あるまじき思ひもこ
ぞ添へ、いと恐ろしきこと、と身づから思ひまざらば
し、異事に思ひ移れど、なほふとおぼえつつ、……人柄
のいとまめやかなれば、似げなさを思ひ寄らねど、さや
うならむ人をこそ同じくは見て明かし暮らさめ、限りあ
らむ命のほども今少しは必ず延びなむかし、と思ひ続け
らる。〔野分八六七頁〕

幼なじみの恋人の「ことはさし措かれて」、紫上に対する
「あるまじき思ひ」を「いと恐ろしきこと」と思い紛らわせ
ようとしてもなおその「面影」の離れえぬ様態が、圈点を施
したごとく、総じて自発の意を色濃く表わす措辞から観て取
れよう。そうして「人柄のいとまめやかな」夕霧のありよう
は、次のように展叙されていく。

(夕霧ハ雲居雁宛ノ一通ノ外) またも書い給うて、馬の助に賜へれば、をかき童わらわ、またいと馴れたる御隨身などに、うちささめきて取らするを、若き人々、ただならずゆかしがる。(野分ニ懼ジテ紫上ノ居所ニ留マツテイタ主人タル明石姫君ガ婦リ) 渡らせ給ふとて、人々うちそよめき、几帳ひき直しなどす。(紫上ヤ玉蔓ノ) 見つる花の顔どもも思ひ比べまほしうて、例はものゆかしからぬ心地に。(夕霧ハ) あながちに妻戸の御簾を引き着て、几帳の結びより見れば、物のそばより(明石姫君ガ) ただはひ渡り給ふほどぞ、ふとうち見えたる。人の繁く紛へば何のあやめも見えぬほどに、いと心もとなし。……かの見つるささく(紫上・玉蔓ノ容姿ヲ)、桜、山吹といはば、これは藤の花とやいふべからむ、木高きより咲きかかりて風になびきたる匂ひは、かくぞあるかし、と思ひよそへらる。かかる人々を心にまかせて明け暮れ見奉らばや、さもありぬべきほどながら、隔てく(のけざやかなるこそつらけれ、など思ふに、まめ心も、なまあくがるる心地す。

【校異】ものゆかしからぬ諸本一ゆかしからぬ(保)

〔野分八七八〜八七九頁〕

偶目した紫上や玉蔓の容貌とも思ひ比べたいとの欲念に駆られ、この場面では、柄にもなく自己本位すなわち「あながちに妻戸の御簾を引き着て」明石姫君の姿態にまで好奇の目

を向けていく。「見レバく見ユ」の構文で示される能動性積極性に基づく視線に即して、おのずと「花の顔」に思ひよそえられる三人——紫上・玉蔓・明石姫君それぞれの様子に、彼は「まめ心も、なまあくがるる心地す」という。が、姫君のことを実際はつきりと目にしたり心が浮かれ出たりしたわけでなかったことは、接頭辞等を添えた一連の用語(「見れば…」ふとうち見えたり」「まめ心もなまあくがるる(心地す)」に明らかであろう。偶発・些少・漠然など、いずれもが不十分不完全なさまを示している。より大きく「…心地く心地す」という照応も認められるこの場面において、夕霧の「人柄」を象徴するのが「まめ心」、その細叙が「例はものゆかしからぬ心地」にほかならない。打消しの形を翻して言うなら「ものゆかし」とは、欲動に駆り立てられ、「まめ心」の常態から逸脱する行動へと踏み出させようと促す情意を表わした語だということになる。

すると、この、「ものゆかし」に冠せられた接頭辞モノも、「うち(見え)」「なま(あくがるる)」などと軌を一にする措辞と把握されるのであろうか。確かに、情意性「もの」形容詞の基本的意味を漠然性だと解く説も有力視されてある。本節はじめに引いた野分の一面面にも、終夜吹きすさぶ「風の音にも、すずるにも、あはれなり」といった描写が見られた。ならば、源氏物語に唯一見とめられる「ものゆかし」もやはり、その一つに数え入れてよいのだろうか。

三、「ものゆかし」とその周辺——用例の再検討

平安時代の文学作品に見える「ものゆかし」の用例を、あらためて検討してみよう。

まず、うつほ物語に見える一例。里下がりしている仁寿殿女御が、娘の女一宮に後事を託し再び参内するに至る場面である。

(1) (女二宮ヲ) こなたにすゑたてまつり給て、御めはなたず、みとぶらひ給へ。(仲忠) 大将、いとものゆかしくし給めり。ゆめみせたまふな。よしともあしとも、人にみせぬぞよき。

〔うつほ物語国譲上(校注古典叢書本四一四七頁)〕
女一宮とともに同座している女二宮の処遇に留意するよう依頼する母女御は、姉娘に妹の目付役を請うて、妙齡の女二宮に関心を持つている大将仲忠を引合いに、器量のよしあしにかかわらず貴女は「人には見せぬ」のが最善だという一般論に及ぶ。「ものゆかし」とは、皇女に惹きつけられる大将(を初めとする)「人」すなわち貴紳)の好奇心を表わす。

次いで、能因本枕草子において「いとど憎」きものを列挙する章段に用いられた二例。

(2) 文ことばなめき人こそいとゞにくけれ。……女房のものを床しうする。……独り車に乗りてもの見る男。いかなる物にかあらん、やん事なからずとも、若き男どもの物床しう思ひたるなど引乗せても見よかし。透き影にたゞ、一

「ものゆかしがり」する心

人かゞよひて、心ひとつにまはりあたらむよ。(能因本枕草子「文ことばなめき人こそ」の段(引用は『校本枕草子』上巻に拠り、私に清濁句読を施し表記を改めた。))
「女房」の物見高さとは、「独り車に乗りてもの見る男」。特に後半で、高貴ならずとも同好の「若き男ども」など「引乗せても見よかし……」と訴えかける口吻を慮れば、前半の女房の物見高さに対しても軽い批難を読み取つてよいのである(10)。

このような女房の物見高さに関して、別途、三卷本枕草子には興味深い記事が見える。長徳元年(九九五)正月、東宮(のちの三条天皇)妃として入内する準備に追われる淑景舎(藤原道隆二女原子)の様子を画く章段で、中宮定子をふくめ娘たちの器量に満悦の体の父道隆が活写されている。

(3) 淑景舎(中宮妹原子)、東宮に参り給ふほどのことなど、いかがめでたからぬことなし。……御膳の折になりて、御髪上参りて、藏人ども、御まかなひの髪あげて参らするほどは、隔てたりつる御屏風も押しあげつれば、かいま見の人、隠れ見の人、隠れ取られたる心地して、飽かずわびしければ、御簾と几帳との中に、柱の外よりぞ見奉る。衣の裾、裳などは、御簾の外に皆押し出だされたれば、殿(道隆)、端のかたより御覧じ出して、「あれは誰ぞや。かの御簾の間より見ゆるは」と咎めさせ給ふに、(中宮ガ)「少納言がものゆかしがりて侍るなら

ん」と申させ給へば、「あな恥づかし。かれは古き得意を、いと憎さげなる娘ども持たりともこそ見侍れ」など宣給ふ御気色、いとしたり顔なり。あなたにも御膳参る。「うらやましよう、かたぐの皆参りぬめり。とく聞こし召して、翁媪おきなに御下しあろをだに賜へ」など、日一日、ただ猿楽言さるがうことをのみし給ふほどに……〔三卷本枕草子「淑景舎東宮に参り給ふほど」の段（和泉古典叢書本九九―一〇二頁）〕

妹原子の礼装に目を凝らす女房たちの存在を「少納言」で代表させた姉定子の詞は、さきの能因本(2)「女房の物ゆかしうする」を具体化した観がある。あるいはむしろ、(3)の記事を一般化して、「女房の物ゆかしうする」という一項が配されたと把握すべきなのかもしれない。筆者を名指しする中宮の詞の言い回しには、女房「少納言」を引き立てると同時に、軽妙なウィットも滲ませていると解釈してよいであろう。

やや時代が下つても、好奇心に満ちた女房のありようは典型として認められる。後冷泉天皇の大嘗会御禊に対する人々の関心の高さを記した、更級日記の一場面がそれである。

(4)そのかへる年（永承元年〔一〇四六〕の十月廿五日、大嘗会の御禊との、しるに、初瀬の精進はじめて、その日京を出づるに、さるべき人々、）「一代に一度の見ものにて、田舎世界の人だに見るものを、月日多かり、そ

の日しも京をふり出でていかむもいと物狂ほしく、流れての物語ともなりぬべき事也」など、はらからなる人は言ひ腹立てど、ちごどもの親なる人は、「いかにもく、心にこそあらめ」とて、言ふに従ひて出だしたつる心ばへもあはれ也。ともにゆく人々もいとみじく物ゆかしげなるはいとほしけれど、「物見て何にかはせむ。か、る折に詣でむ心ざしを、さりともしなむ。必ず仏の御しるしを見む」と思ひたちて、その暁に京を出づるに、……〔更級日記（校注古典叢書七四頁）〕

「一代に一度の見物」で「田舎世界の人」でさえ見ようとする御禊を実見することなく初瀬精進に随行せざるをえぬ人々の心残り。形容動詞「ものゆかしげなり」を用いた右の叙述は、枕草子(2)(3)の例で見た女房のあり方と軌を一にするであろう。

ちなみに御堂関白記には、「すべておほかたに引き渡していくほど目もか、やきてえも見わかず」（栄花物語巻第十ひかげのかづら）と叙せられる、三条天皇の大嘗会御禊における行列の出車の様子を、以下のごとく記した箇所がある。

〔長和元年（一〇二二）閏十月〕廿七日……檳榔毛金作三車……唐車三兩……件六車、其様雖似例車、甚以奇怪風流、非以詞可云、所未見也、目耀心迷、非可書記、……〔御堂関白記（大日本古記録本中卷一七八頁。句読返り点は私意。）〕

女御代を勤めた三女威子の乗る先頭の車に従う女房車のうち、とくに「檳榔毛金作」の車と「唐車」と併せて六両の意匠を、道長は、通例に似るとはいえども「甚ダ以テ奇恠ナル風流」として形容すべき詞もなく「目毛耀キ心毛迷ヒ」筆舌に尽くしがたいと評している。贅を尽くした車の一行が世人注目の的となったこと、容易に察せられよう。

一方、源氏物語においては、前節に引いた野分巻の「ものゆかし」一例のほか、関連する動詞「ものゆかしがる」が二例見とめられる。

- (5) (明石尼君ハ) 残りの命うしろめたくて、(光源氏一行ノ参詣ノ様子ヲ) かつ／＼物ゆかしがりて、したひ参り給ふなりけり。さるべきにて、もとよりかく匂ひ給ふ御身どもよりも、いみじかりける契り、あらはに思ひ知らる、人の御ありさまなり。〔若菜下一一三七頁〕

- (6) (光源氏ハ紫上ヲ) 寝殿に渡し奉り給ふ。御供に(女房達ガ) 我も／＼と物ゆかしがりてまうのほらまほしがれど、こなた(音楽ノ方面)に遠きをば選りと、めさせ給ひて、少しねびたれど、よしある限り選りてさぶらはせ給ふ。〔若菜下一一四八頁〕

どちらも若菜下に見える。前者は、明石尼君が老齢ながら光源氏の住吉詣に同行した経緯にふれる一節で、参詣の盛儀に寄せる尼君の関心の高さを示す。後者は、六条院で催される女楽合奏に興味津々たる女房たちの様子を画き出す。両例

「ものゆかしがり」する心

とも、連用修飾句「物ゆかしがりて」が催事への並々ならぬ好奇心を表わしている。

源氏物語には、接頭辞モノを冠せず、心ひかれるさまを表わす「ゆかしがる」も十三例検索される。いま、対象ごとに類別しながら例証をいくつか掲げてみれば、以下のとおりである。

〈恋文あるいは艶書めく返書〉

- ① 近き御厨子なる色々の紙なる文どもを引き出でて、中|
わりなくゆかしがれば、……〔帚木三六頁〕

- ② 又の日、上にさぶらへば、台盤所にさしのぞき給ひて、
「くはや。昨日の返りこと。あやししく心ばみ過ぐさるる」
とて投げ給へり。女房たち、何ごとならむとゆかしが
る。〔末摘花二二六頁〕

〈楽器の音色〉

- ③ この、常にゆかしがり給ふ物の音など、さらに聞かせ奉
らざりつるを、いみじう恨み給ふ。

- 〔明石四七〇～四七一頁〕
- ④ 「……まだ聞こしめし所ある物深き手には及ばぬを、何
心もなく参り給へらむついでに、聞こしめさむと許し
なくゆかしがらせ給はむは、いとほしたなかるべき事に
も」と、いとほしく思して……〔若菜下一一四五頁〕

- ⑤ 飽かず、一声聞きし御琴の音を、せちにゆかしがり給へ
ば……〔権本一五五五頁〕

〈物語絵・日記絵〉

④ かやうの女言にて、乱りがはしく争ふに、ひと巻に言の葉を尽くして、えも言ひやらず。ただ、浅はかなる若人どもは死にかへりゆかしがれど、上のも、宮のも、片端をだにえ見ず、いといたう秘めさせ給ふ。

〔綜合五六六―五六七頁〕

① その頃のことには、この絵の定めをし給ふ。「かの浦々の巻は、中宮にさぶらはせ給へ」と聞こえさせ給ひければ、これが初め、残りの巻々、ゆかしがらせ給へど、「今つぎつぎに」と聞こえさせ給ふ。〔綜合五七三頁〕

〈幼な子の動静〉

① 「さらばこの若君（明石姫君）を。かくてのみは便なき事なり。思ふ心あれば、忝なし。対に聞きおきて常にゆかしがるを、しばし見慣らはさせて、袴着のことなども、人知れぬさまならずしなむとむ思ふ」と、まめやかに語らひ給ふ。

【校異】ゆかしかるを御大横池耕肖三〔陽麥阿〕

―ゆかしかり給を（七宮尾大曼）〔保〕

―ゆかしうし給を〔坂〕

〔薄雲六〇三頁〕

② 君をせちにゆかしがりきこえ給へば……

〔宿木一七七五頁〕

恋文あるいは艶書めく消息をはじめ、楽器の音色、絵、幼

な子の動静など、耳目を喜ばせる対象を「ゆかしがる」人々の様子が画かれている。ただし、「物ゆかしがる」の用例と比較してみると、心ひかれる対象の具体的なありようへの志向がいささか異なる印象をおぼえる。

② 明石（入道）にも、さこそ言ひしか、（娘御方二対スル光源氏ノ）この御心おきて、ありさまをゆかしがりて、おぼつかかなからず人は通はしつ、胸つぶるる事もあり、又おもだたくうれしと思ふ事も、多くなむありける。

【校異】ゆかしかりて…かよはしつ、―ゆかしうおもひをこせつ、おほつかかなからぬ程にゆきかふに〔坂〕

〔薄雲六一三頁〕

上京した娘のことを光源氏がどのように処遇するつもりなのか気懸かりで、その動静を探るべく人を通わしつ情報を得ている父の様子を画く薄雲巻の例。ここでは、入道が明石にとどまっているという制約もあるけれど、一定程度抽象された実情でも間接に知りたいとの意を「ゆかしがりて」が表わしているように思われる。

あるいはまた、薫との馴初めを執拗に聞き出そうとする匂宮の様子。

③ 女、濡らし給へる筆を取りて、

心をば嘆かざらまし命のみ定めなき世と思はましかば、とあるを、変はらむをば恨めしう思ふべかりけり、

と見給ふにも、いとらうたし。「いかなる人の心変はりを見ならひて」などほほ笑みて、大将のここに渡し始め給ひけんほどを、かへすくゆかしがり給ひて問ひ給ふを、苦しがりて、「え言はぬことを、かう宣給ふこそ」と、うち怨じたるさまも若びたり。おのづからそれは聞き出でてんと思すものから、言はせまほしきぞ、わりなきや。

〔浮舟一八七九頁〕

宇治にかくまわれた経緯を女自身の口から言わせてみたいと欲する男のいやらしさが感ぜられる。評言「わりなきや」が女の側に立つた草子地と解される所以であろう。事情の具体性よりもむしろ抽象されたとしても、当事者本人に語らせること自体に主眼があるのである。ここに「ゆかしがる」に接頭辞モノを冠し「ものゆかしがりて」と作る表現との差異も鮮明となるように思う。

すなわち源氏物語若菜下において、

- (6) 六条院での女楽合奏に対する女房達の興味津々の様態
 - (5) 光源氏の住吉詣の盛儀に寄せる明石尼君の関心の高さ
- を画く二例とおなじく、連用修飾句「ものゆかしがりて」を用いた(3)定子中宮の詞や、あるいは(4)形容動詞「ものゆかしげなる」を用いた場面で、人々を惹きつける対象はそれぞれ、

- (4) 一代一度の見物である大嘗祭御禊の盛儀（更級日記）

「ものゆかしがり」する心

- (3) 東宮妃として入内する淑景舎の人の麗姿

（三卷本枕草子）

のごとく、具体的ですこぶる感覚性官能性に富んでいることがわかる。形容詞「ものゆかし」を中心に「ものゆかしげなり」「ものゆかしがる」と接頭辞モノを冠した語例を吟味してみると、わずか数例ではあるけれど、いずれも五感に強く訴えかける対象への強い関心を表わしていると理解されるのではないか。¹⁾かくして、(2)筆者の設想や、(1)作中人物の詞として、

- (2) 同好の者に目もくれず車で独りの物見能因本枕草子

(1) 貴女に向けられた貴頭の興味関心（うつほ物語国譲上）を述べるこれらに、接頭辞モノを冠する「ものゆかしく（す）」が用いられていた理由も得心されるにちがいない。

「ものゆかし」を基とする一連の用言に冠せられた接頭辞モノは、したがって、漠然性を表わすというよりむしろ、感覚性官能性を具えた事物事象への志向を語形として明示したものと把握すべきなのではあるまいか。

四、「もの好み」する人々——源氏・狭衣の用例

ところで、「ものゆかし」を基とする一連の語と類義関係をなすと考えられる語に、「もの好み（す）」「もの好まし」がある。

源氏物語では、「もの好み（す）」が四例「もの好まし」が

一例用いられている。

- ① 高麗の紙の薄様うすやうだちたるが、せめてなまめかしきを、「このものこのみする（家河）若き人々（物）このころみむ」とて、宰相の中将（夕霧）、式部卿宮の兵衛督、内の大殿の頭中將（柏木）などに、「蘆手、歌絵を、思ひ思ひに書け」と宣給へば、みな心々に挑むべかめり。〔梅枝九八五頁〕
- ② （螢兵部卿ハ）何（物）ことともこののみし（家河）艶（物）かりおはする親王にて、いとみじうめで聞こえ給ふ。〔梅枝九八七頁〕

明石姫君の入内準備のために新しく今の上手の筆墨を集めようと、螢兵部卿はじめ若公達にも草子作りを依頼する光源氏。梅枝巻のこれら二例は、貴族のたしなみをいったもの。

また、匂兵部卿巻の次の例は、父夕霧が適齡の娘六君の身辺に風流な趣向を凝らして、若公達を魅惑しようとする様子を画いている。

- ③ （夕霧ハ娘六君ヲ）わざとはなくて、この人々（薫ヤ匂宮ニ）に見せそめては、かならず心とどめ給ひてむ、人のありさまをも、知る人は殊にこそあるべけれ、など思（物）して、いといつくしくはもてなし給はず、今めかしくをか（物）しきやうに、ものこのみせさせて、人の心つけむたより多く作りなし給ふ。〔匂兵部卿一四三九〜一四四〇頁〕
- 前節で検討した(1)うつほ物語國讓上における母女御の詞と正反対のごとき処遇は、年頃の娘を持った女親男親それぞれ

の立場のちがいにも由来すると評してよからうか。

- ④ 「苦しままでもながめさせ給ふかな。御碁を打たせ給へ」と言ふ。「いとあやしくこそはありしか」とは宣給へど、打たむと思したれば、盤取りにやりて、我はと思ひて先せさせ奉りたるに、いとこよなければ、また手直して打つ。「……碁聖が碁には優らせ給ふべきなめり。あな（物）いみじ」と興ずれば、さだ過（物）ぎたる（阿）尼額（物）の見つかぬに、物このみするにむつかしきこともしそめてけるかな、と思ひて、心地あしとて臥し給ひぬ。〔手習二〇二頁〕

右は、碁に興ずる少将尼君の言動を活写する手習巻の例。横河僧都の妹尼とこの人は、

- （横河僧都ノ妹）尼君ぞ、月など明き夜は、琴（物）など弾き給ふ。少将の尼君などいふ人は、琵琶（物）弾きなどしつづ遊ぶ。〔手習二〇〇四頁〕

と紹介されてもいたように、山荘での徒然を慰めるたしなみを身につけていた。僧尼令には「碁琴不（物）在（阿）制限」と定められている。したがって④は、貴族社会という世俗における対人関係に倦み疲れた浮舟の目をとおして、碁石の生死にかかわる勝負への興味が出離のくらしにも滲透している違和感を画いたもの、と読み取るべき一場面なのであろう。

これらに対し、以下に掲げる総角巻の例は、一見すると「もの好み」を否定的に捉えていると受け取られるかもしれ

ない。

⑤ 中宮、「なほかく独りおはしまして、世の中に好い給へる御名のやうく聞こゆる、なほいと悪しきことなり。何こともものこのましく立てたる心なつかひ給ひこそ。上も後ろめたげに思し宣給ふ」と、(匂宮ガ) 里住みがちにおはしますを、諫めきこえ給へば……

〔総角一六二四頁〕

「趣味に偏らぬことを貴族の理想としたことは、匂兵部卿」巻に見える。

5' わざとめきて、香にめづる思ひをなむ、立てて好ましくおはしける。かかるほどに、少しなよび和らぎて、好いたるかたに引かれ給へり、と世の人は思ひきこえたり。昔の源氏は、すべて、かく立ててそのことと、やう変はり、しみ給へるかたぞ無かりしかし。

〔匂兵部卿一四三六頁〕

薫の身に生来そなわる芳香に張りあい、「香にめづる思ひ」を好んだところから、世に「匂ふ兵部卿、薫る中将」と並び称される設定へと導いてゆくこの場面では、実生活における自然体から度を越してしまうようなあり方を「好いたるかたに引かれ」ていると叙し、とり「立てて好まし」くあることが非難されている。「昔の源氏」を引証するのは、匂兵部卿巻における語り手が彼を、調和と円満とを体現する失なわれた理想だと考えているからにちがいない。言い換えれば⑤で

は、貴族として身につけておくべき技倆は器量を大きくするのに望ましいのだけれど、「情や趣味に溺れがちである」のはふさわしくない、という皇族の心組みが、明石中宮の詞を透して語られているのである。

「好いたるかたに引かれ」「立てたる心」づかいをすること、偏執に陥って均衡や余裕を失くしてしまうことこそが難ぜられているのであって、藝能に対する「もの好み」自体が否定されているわけではない。手蹟(書)、手談(碁)、手語(琴)といった、すべて人の手によって実現される才藝への深い造詣と、五感に衝き動かされる情意「ものゆかし」との峻別が、ここに再認識されなければならない。「ものゆかしがり」するいわば浅い欲動が、対象への好奇心に引かれるがまま「立ててそのことと、やう変はり、しみ」るようなあり方へと繋がっているのではなかったか。後世の美的理念「すぎ」のうちには包摂しえぬありように留意しなければならぬ所以である。

狭衣物語においても、索引類に拠れば、「もの好み(す)」「もの好まし」併せて五例ばかりが検出される。

⑥ 太政大臣の御方(洞院上)は、なかのこのかみにて、もとかしはにおはすれど、かかる扱ひくさも持ち給はねばにや、我が御有様ひとつを、はなやかに今めかしうもてない給ひて、我はと誇りかにおし立ちたる御心掟てにぞおはしける。人よりは、いかでと、もて出でたる御物好み

などして、いとわららかに、人にくからぬ御心掟てなるべし。〔狭衣物語卷一（新潮日本古典集成本上五四）五五頁／日本古典全書本上二二二頁〕

cf. 人よりはことなる御物好みなどしたまひて

〔新編日本古典文学全集本①七一頁〕

⑦ 失せにし母のなま親族の、高きまじらひして、人数ならで世にありわぶる、さすがにゆゑつきもの見知り顔にて、かたはらいたきもの好みさらずともおほゆる、ありけり。〔狭衣物語卷一（新潮日本古典集成本上七九頁／日本古典全書本上二四三頁）

cf. いとしも見ぬことも知り顔になどやうにて、かたはらいたき物好みなどをさし過ぎたる者ありけり。

〔新編日本古典文学全集本①一〇一頁〕

⑥ 洞院上と、⑦ 今姫君の母代と、二人の人物設定に用いられた「御」もの好み」は、それぞれ「もて出でたる」「かたはらいたき」という限定も添うところから調和を欠いた嗜みであること、明白であろう。

⑧ 〔狭衣八粉河寺カラノ帰途〕また、櫂の雫のしほどけさも知らず顔に手づから漕ぎかへりつつ（舟人ガ）声をかして、「あれ、妹背の山か、さはれ」と歌ひたるさまどもは、おのおの誇りに思ふこと無げなるは、なほ「我ばかりもの思はしきは無きなめり」と、うらやましく思ひわたされ給ふ。

行き帰り心まとはす妹背山思ひ離るる道を知らばや、避くかたの無かりけるも、契り心憂くながめ入りて、

〔狭衣ガ〕舟の端に寄りかかりつつねぶり給へる御まみの気色、なまめかしう見え給ふを、物好ましき若君達な

どはめでたうのみ見奉り給ひて、もの心細げなる御気色を、なほ「いかなる御心のうちにか」と、安の河原の千鳥にも問はまほしかりける。〔狭衣物語卷三（新潮日本古典集成本下一二一―一三頁／日本古典全書本下一〇頁）

cf. もの好ましげなる若上達部などは、めでたうのみ見奉るに〔新編日本古典文学全集本②二〇頁〕

⑨ まこと、かの大殿の御方にかしづかれ給ふ今姫君は、二十にもやや余り給ふまに、いとをかしげにねびまざり給ふを、母上（洞院上）いとはなやかに物好みし給ふ御本性にて……せちに「人に劣らじ」の御心掟てにて、内裏参りの事（今姫君入内事）など思し寄りにけり。

〔狭衣物語卷三（新潮日本古典集成本下一二五頁／日本古典全書本下一九頁）

cf. 母上はなやかに物好みしたまふ御本性にて

〔新編日本古典文学全集本②三三三頁〕

⑩ 又の年の秋冬は、大原野、春日、平野などの行幸あり。〔狭衣ガ踐祚シテ〕初めてめづらしき御みゆきなるに添へても、帝の御顔かたち、ありさま、このごろ盛りにねび整ほり果てさせ給ひて、少しもなめならむ事は、飽

かず口惜しかりぬべき御時なればにや、あながちに物好
みする人のみ多くなりて、上達部、殿上人などの馬鞍の
飾りも、舎人、馬副のなりかたちなども、「世にめづら
しきさまにも」と、誰も営み給へれば、見所はこよなき
を、いかなる人か見ぬはあらむ。「狭衣物語卷四（新潮
日本古典集成本下三三九―三四〇頁／日本古典全書本下
二六七頁）」

cf. あながちに物好みする人のみ多くなりて

〔新編日本古典文学全集本②三七三頁〕

また、⑥で設定された洞院上の性格描写を承ける⑨はもち
ろんのこと、やや引用が長くなつたけれど⑧において、舩で
愁いに沈む主人公の心を思いやる若君達のあり方や、⑩主人
公の踐祚後初めて催される、大原野、春日、平野などの行幸
に営み励む人々の「あながちに」と限定されたあり方、この
どちらかが、十善を実現しうる主人公の存在を意識した人々
の、いささか過剰な「物好み」のさまを表わしているであ
らう。

ちなみに、栄花物語に見える「物好み」の一例は、我が子
に先立たれ、以前のような風流事にも関心を寄せなくなつた
彰子が出家を遂げる記事に用いられている。

（上東門院彰子）女院は尽きせず故院（彰子所生ノ後一
条院）の御事をおほしめして、ありしやうに物好みもせ
させ給はず、女房なども衣の音いたく高くもせず、しめ

「ものゆかしがり」する心

やかにいともてなしたり。「世は再びも」と仰せられ
しかど、なほひとたびに背き果てさせ給つ。「栄花物語
卷第三十四・暮まつほし（全注釈六、四二八頁）」
女院としての「物好み」はもとより円熟の域に達してい
たにちがいない。

五、「もの好みする人」——狭衣物語の異文

このように「もの好み（す）」「もの好まし」「もの好まし
げ」の意味合いがおおよそ風流事への関心に収斂するかと見
透される一方で、狭衣物語の場合、いわゆる流布本系統の⑥
から⑩の場面が、伝慈鎮筆本等においては以下のような異な
る叙述となつている点に注目される。

6. 大殿の御方にも、とかしけにて御こ、ろはえもはな
しくてなに事をもわれこそなとおほしおきて齋宮の御お
ほえのことなるをもいとものしうおほさるへからんめれ
とさりとてくせくしうなどハなくたれをもきこゑかハ
しなたらかなる御けしきにぞあるへき

〔伝慈鎮筆本狭衣卷一39オ―39ウ〕

6' 大殿の御かたにもとかしからぬ御心にて我こそなと
おほしをきて齋宮の御思のことなるにもいとものしう
おほさるへかんめれとさもとてくせくしくなとはな
くたれをもきこゑかハしなたらかなる御心にぞあるへ
き〔紅梅文庫本卷一29オ〕

7. は、のなきしそくたちてたかきましらひしてひとかすな
 らてハよにましらぬわふる人ありけるそは、しるにそひ
 てわたりたる中くなる物、ミヤ人なとしりこ、ろたち
 とうたう中くさきすきミくるしきをうゑもミ給へとう
 ちそひ給へる人をなまいりそなどの給へきならねハかた
 はらいたくミ給ふなりしさすかにそなたのおとなして
 と、このましようもてなしきこゑたり

〔伝慈鎮筆本狭衣卷一53オ〜53ウ〕

7' 母のゆかりにてたかひましらひして人かすなうて世に
 ましらひならふかたありける人は、しるにそひてわた
 りける中く物の見やりなとしりくちたちなとさしす
 きてみくるしきをうへものしと見給へとうちあひ給
 へる人をいかにそなどの給へきならねはかたはらい
 う見給なからさすかにそのかたのおとなしくいとこの
 もしようもてなしきこゑたり

〔紅梅文庫本卷一40オ〜40ウ〕

前節で確かめたごとく、⑥と⑨とに照応していた大殿御
 方（洞院上）の「物好み」する「本性」の描写は、異本の卷
 一6（6）では全く見られず、むしろ「癖くしうなどハ無
 く、誰をも聞こえ交はし、なだらかなる御けしきにぞある
 べき」と語り手が推しはかる草子地で暗示にとどめられ、読
 み手に期待感を抱かせながら先の展開へと誘導していく。こ
 れは、今姫君の母代の性格設定7（ア）に「物好み」の語が

用いられていないことも並行して捉えるべき語り口かと思
 う。二人の女性はおなじ用語で類型化されてはいないのであ
 る。

8. 又てつからこきかへりかひのしつくのミほとけさもしら
 すかほにあそひしほたれつ、こゑハをかしくてあれハ
 もせのやまかそハされとうたひミたる、さまともおの
 くほこりに思ふ事なけるハなをわれはかり物思は
 しきハなきなめりかしようらやましくミたれ給て

こきかへりこ、ろまとはすいもせやま

思ひはかる、ミちをしらはや

とのミなかめいり給てことに物もの給ハすあないミしや
 いミしくこそねふたけれどてふねのはたによりか、りて
 うちねふり給へるけしきのいひしらすなまめかしうみゑ
 給ふをひとつになまめかしきなまきむたちハめてたうの
 ミぞミたてまつるにことすくなにしつまり給て物こ、ろ
 ほそけなる御けしきをいかなる御こ、ろにかやすか、ハ
 らのちとりにとはまほしかりけり

〔伝慈鎮筆本狭衣卷三3ウ〜4オ〕

【校異】ひとつになまめかしきなまきむたちハめてたうの
 ミぞミたてまつるに——物このまきわか、むたちめ
 なといひあはせつ、めてまとふに（紅梅文庫本卷三4
 オ）

愁いの眠りに沈んでいる主人公の心を思いやる同行を画い

た8.においても、「物好まし」が用いられないばかりでなく、「ひとへになまめかしきなま公達」といった工夫ある措辞が配されている。ちなみに源氏物語には、接尾辞をつけた複合語「なま公達めく」が一例、東屋巻に用いられている。

9.まことやかのおほきおと、の御かたにかしつかれたまふいまひめきみは廿にもあまり給ふらんとぬひまさり給ハ、うゑいとほなやかにもこのミし給ふ御こ、ろにてとうくうの御ありさまミたてまつり給ふをいとうらやましくすゑのこ、ろほそさもおほししられてこのきミをかまくまでとりよせつとならハおなしくハわか、た、のもしきものにせんなどおほしなりてうちまいりのことをとのにきこゑさせ給へと……

〔伝慈鎮筆本巻三12ウ〜13オ〕
【校異】ハ、うゑいとほなやかにもこのミし給ふ御こ、ろにて——は、うへはいとはなやかに物うらみしたまふ御本上にて（紅梅文庫本巻三12ウ）

巻一6.(6)で保留されていた洞院上の性格は、この、「まことやか(か)」と切り出される巻三の9.において、端的に「いとほなやかに物好みし給ふ御心にて」と約言される。紅梅文庫本の翻刻「物うらみ」は「物このみ」からの転訛とすべき箇所であろう。ここは、養母たる洞院上が今姫君の入内の事を推し進めようとする強い動因を明かした場面転換だと捉えることができる。

「ものゆかしがり」する心

10.又のとしのあきふゆハおほはらのかすかかもひらのなどの行幸ありはしめてもめつらしき御ミゆきなるにそえても御かほありさまこのころさかりにねひと、のをりはてさせ給てすこしもなめならんことハあかすくちをしがるべき御ときなるにやあながちにも物、このミする人のミおほくなりてかむたちめ殿上人などの御馬くらなとのかさりもとねりむまかひのなりかたちなどをよにめつらしきさまにもとたれも思ひいとなミ給へれハミところもこよなきをいかなる人かハまたミぬハあらん〔伝慈鎮筆本狭衣巻四121ウ〜122オ〕

【校異】あなちにも物、このミする人——あなちにもこのミする人（紅梅文庫本巻四120ウ）

そして巻四、主人公踐祚後の盛儀に営み励む人々の様子を画き出す場面10.では、流布本とも一致する表現が用いられている。巻一6.7.で、流布本に作るような「もて出でたる御物好み」「かたはらいたき物好み」という表現を有していない伝慈鎮筆本であるから、「あながちに(も)物好みする人のみ多くなりて」という描写は、登極した主人公の盛代を象徴する表現と理解してよいのであろう。

以上要するに、伝慈鎮筆本の6.から10.に用いられている表現の区々に対して、いわゆる流布本系統の⑥から⑩の場面ではむしろ措辞が一様に収斂しているように見受けられるのである。

【「もの好み」「もの好まし」の本文異同】

対象 伝慈鎮筆本 紅梅文庫本 流布本（新潮集成）

⑦洞院上 もとかしけ^さにて御心 もとかしからぬ御心 もとかしはに……

ばへも華々しくて 華やかに今めかしう

何事をも我こそなど にて我こそなど 我はと誇りに押し立ち

人よりはいかでと

〔辭々しくなどはなく〕 〔辭々しくなどはなく〕 もて出でたる御物好み

⑦母代 そなたのおとなして そのかたの大人しく ゆゑづき物知り顔にて

いとど好ましく いと好ましく かつはらいたき物好み

②公達 ひとつになまめかしき 物好ましき 物好ましき

〔なま公達〕 若上達部 若公達

④洞院上 いろはなやかに いろはなやかに いろはなやかに

物好みし給ふ御心 物恨みし給ふ御本上 物好みし給ふ御本性

④世人 あながちにも あながちに あながちに

物の好みする人 物好みする人 物好みする人

いま「もの好み（す）」「もの好まし」の語の有無に焦点を合わせ作品本文を一通り対照表示してみると、上のとおりである。これら五例の限りに対して、おおよそ後半になるほど「物好み」という語に共通化して固定していくさまが観て取れよう。

流布本巻一⑦④に用いられた二例の「物好み」はどちらも連体修飾語を伴って、洞院上・今姫君母代あたりの偏頗な「物好み」が顕示されるところに、別人格ながら類型的に捉えられる契機ともなっている。そうして巻三④においては、洞院上の「いろはなやかに物好みし給ふ」性格を設定する表現が一致共通して端的に示されるところから、流布本巻一⑦〔もて出でたる御〕物好み」という設定は、④をいわば先取りした表現となっていると理解されるであろう。併せて⑦における本文異同の状況からは、「最年長の古株」を意味する「もとかしは（本柏）」が理解不通となった結果、誤解や誤伝等も与かつて「もどかしげ」「もどかしからぬ」へと変じた過程などがわかる。

顕著な異同をもつ⑦——洞院上の性格設定をめぐっては、流布本が作品世界を先取りした結果を映す徴証の一つとして定位しうる余地がある。これに対して伝慈鎮筆本では、⑦「もとかしは」を「もとかしけ」に改めたり、あるいは④「ひとへ」を「ひとつ」と誤写したりなどする瑕瑾も見受けられるけれど、鎌倉前期の四巻一筆になる現存最古の写本と

して、一定の古態を遺す伝本として、やはり尊重すべきものと考へる。そうして、伝慈鎮筆本に比して流布本本文にはその後発性がうかがわれるのではなからうか。

異同の程度が甚だしい⑦⑧、相対的にその程度の低い⑨、そして、ほぼ一致共通する本文に作る⑩⑪と、三様の状況を照らし合わせてみる限りにおいて、伝慈鎮筆本から流布本へ、言語様態の斉一化していく趨向が見透されるように思われる。流布本に見る表現の整理は、理解の平易をもたらず一方で、抑揚ある文脈の起伏が失なわれ、作品を単調に平板化する結果を招くことともなる。併せて、「近世初期の公卿と僧侶の筆になったことがわかる」紅梅文庫本には、その当時における本文解釈の合理化も含め、鎌倉前期の書写にかかわる伝慈鎮筆本のようないわば古態を保ちながらも流布本で整えようとした本文の姿が遺されているものと想察されるのである。

六、「ものゆかしがり」——源氏物語若菜下の異文

さて、あらためて源氏物語野分巻に立ち戻ってみると、

(明石姫君ノ容貌ニツイテ紫上ヤ玉蔓ノ) 見つる花の顔
どもも思ひ比べまほしうて、例はものゆかしからぬ心地
に、あながちに妻戸の御簾を引き着て、几帳の綻びより
見れば……〔野分八七八頁〕

と、夕霧が実際に行動を起こしていく展開は、「まめ心」に

はそぐわぬ欲動を端的に示しているものと認めてよい。ゆえに、別本系保坂本一本にのみ接頭辞を冠せず「(例は)ゆかしからぬ(心地に)」と作るような場合、女君たちの姿態に魅了されてしまった夕霧の惑乱を的確に表わしえておらず、採るべき本文の形とは認められないであろう。

加えてさらに注目すべきが、第三節で検討した源氏物語若菜下の両例に共通して見とめられる異文の存在である。いま、源氏物語大成に拠って校異を示せば、以下のごとくである。

(5) 若菜下一一三七頁⑪

〔別本〕物ゆかしかりて―物ゆかしかりして〔保阿〕

(6) 若菜下一一四八頁⑫

〔青表紙〕物ゆかしかりて大横榊池陽肖―

―物ゆかしかりして三

〔河内本〕物ゆかしかりて(御七宮尾平大鳳國)

〔別本〕物ゆかしかりて阿―ものゆかしかりして〔保〕

物ゆかしかりてまうのほらまほしかれと―まう

のほりて物ゆかしかりする人おほかり〔阿〕

ともに「ものゆかしがりて」と作る箇所を、「ものゆかしがり(す)」と名詞を含んだ形に作る異文が、おおよそ別本系を通じて遺されていることが知られる。形容詞「ものゆかし」を基とする動詞「ものゆかしがる」が体言化したこの語に至っては、具体的対象の存在への志向性がより一層強まっ

ているように思われる。

物羨みし、身の上嘆き、人の上いひ、露露はかり能因本ちりのこともゆかしがりがきかまほしうして、言能因本ひ知らせぬをば怨じ、しり、また、わづかに聞き得たることをば、わがもとより知りたることのやうに、異人にも語りしらぶるも、いとにくし。「三卷本枕草子」に「くきもの」の段（和泉古典叢書本二三頁。能因本との対校は『校本枕草子』上巻七一頁参照。）

例えば、この、「露露はかり能因本ちりのこと」を対象とする「ゆかしがり」の用例など対照すれば、「ものゆかしがり」との違いが思いめぐらされようか。接頭辞モノは単なる漠然性の添加でなく、対象の存在をそれと示す語形にほかなるまい。

あるいは、能因本「文ことばなめき人こそいとど憎けれ」の段の後半部分が、別途、「いみじく心づきなきもの（は）」の段の書き出しに、小異をもつ形で収められている。

【能因本】……ひとり車こに乗りても見る男。いかなる物にかあらん、やん事なからずとも、若き男どもの物床しう思ひたるなど引乗せても見よかし。透透き影影にた、一人か、よひて、心ひとつにまはりたるらむよ。

【能因本】いみじく心づきなきものは、祭、禊など、すべておのこの見る物見車こにた、ひとり物ゆかしと思ひたるなど引き寄せても見よかし。透透き影影にた、ひとりか、よひて、心ひとつにまもりあたらむよ。

【三卷本】いみじう心づきなきもの。祭、禊など、すべて男の物見るに、只ひとり乗りて見ることあれ、いかなる心にかあらん、やんごとなからずとも、若きおのこなどのゆかしがるをも引き乗せよかし。透透き影影に只ひとりた、よひて、心ひとつにまほりあたらんよ。いかばかり心せばく、け憎きならん、とぞおほゆる。……〔引用は『校本枕草子』に拠り、私に清濁句読を施し表記を改めた。〕

「いとど憎し」「いみじう心づきなし」と評語は異なるものの、独り牛車に乗って物見を楽しむ男に向けられた不愉快の点で共通する枕草子の記事。とりわけ三卷本のように、同好の「若き男（おのこ）」が関心を示すさまを単に「ゆかしがる」と作るより、能因本の両章段に一貫するごとく「ものゆかし」と接頭辞モノを冠した語形のほうが、物見の対象への志向性が強く示されているのであろう。

（匂宮ハ）京のうちだに、むげに人知らぬ御ありきは、さはいへど、えし給はぬ御身にしも、あやしきさまのやつれ姿して、御馬にておはする心地も、もの恐ろしく、やましけれど、もののゆかしきかたは進みたる御心なれば、山深うなるままに、いつしか、いかならむ、見合はすることも無く、帰らむこそ、さうくしくあやしがるべけれ、と思すに、心も騒ぎ給ふ。（浮舟一八六頁）

他方、源氏物語浮舟巻に書き出される、この、匂宮の「もののゆかしきかたは進みたる御心」とは、女人との官能的出

合いを求めようとする性向をいう。ちなみに、別本系麥生本には「物ゆかしき」と一語に作つてもいる。この場面に配された「もの」とは、もつぱら、魅惑する存在としての異性を直示した表現と考えてよいのである。まさしくこのような男の心こそ「ものゆかしがり」する心と評されるにふさわしいのではないか。

七、「二位中将」の人物設定——狭衣の異文と引歌

「ものゆかし」およびその一連の語に冠せられた接頭辞モノは、たんに漠然性を表わすのでなく、対象の存在を語形として明示することで、むしろ対象となる当の事物事象への強い志向性を表わしている。おおよそ平安時代の文学作品とおして認められる「ものゆかし」とその派生語が表わす情意は、すこぶる感覚性官能性豊かな対象に向けられた強い好奇心なのである。

ここに、一世一代の大嘗祭が典型と考えられる祭や禊などの盛儀をいわば一つの極として、これに相對するもう一方の極をなす対象の典型として、男性を蠱惑する存在たる女性を位置づけることが許されるであろう。狭衣物語の主人公「二位中将」が「ひとわたりものゆかしがり」する「男といふもの」の範疇に含まれるとした設定も、きわめて自然なのであった。

(一) おしなへてミたりかハしき物ゆかしかりをそし給ハさり

「ものゆかしがり」する心

けるた、ひきすき給みちのたよりにもすこしゆへつきて
ミゆるやまかつのかきほのなてしこにはおのつからめと
まらぬにしもあらぬほどにおのつからのをなつかしミた
ひねし給ところもあるにやまめやかなりといひながらい
かてきたにおハせさらんおとこといふものハあやしきた
にいかなるもひとわたりものゆかしかりせぬものハなき
よのさかなりける

〔伝慈鎮筆本狭衣卷一8ウ〕

ところが、当の狭衣物語には、特に後半の傍線箇所「おとこといふものハ……」以下の部分に、次のような全く異なる本文も伝わっているのである。

(二) i おとこといふものハあやしきたに身のほともしらす

人にく、ろをつくすわさな・りかし

〔伝為明筆本さころも12ウ〕

ii おとこといふもの・あやしきたに身の程・もしらす

人にく・をつくすわさな・めりかし

〔飛鳥井雅章筆本さころも11ウ〕

(三) i おとこといふものハあやしきたに・・・もしらす

人にく・をつくる・なんめりかし

〔伝為家筆本さころも18ウ〕

ii をとこといふものハあやしきたにミのほともしらす
人にく、ろをつくるわさなんめりかし

〔伝清範筆本さころも13ウ〕

「男・・といふものはあやしきだに、身の程も知らず
人・心・・をつくるわざなめりかし。」

〔狭衣物語卷一（集成上一七頁／全書上一九一頁）〕

（四）……さたにかてかおはせさらんおとこといふ物はあや

しきたに身の程しらすあらぬおもひをつくる。とかや光
か、やき給御かたちをはさる物にて……

〔深川本狭衣卷一 80—80〕⁽²⁰⁾

（一）「ひとわたり物ゆかしがりせぬものは無き世のさが」と
作る以外に、（二）「人に心を尽くすわざ」あるいは（三）「人に心
を付くるわざ」、さらには（四）「あらぬ思ひを付くるもの」と、
叙述はおおよそ四様に分かれたる。「わざ」あるいは「もの」
と作る本文とその有無については「世のさが」とも連動して
捉えるべきなのであるうけれど、いまは措いて、ここでは
「わざ」「もの」を限定する修飾句のちがいに焦点を絞ってみ
たい。

まず、「わざ」を修飾する表現のほうから考えよう。

題不知

花園左大臣

①はかなくも人^あに心^こをつくす^すかな身^みのためにこそ思^{おも}ひそめ
しか

〔千載和歌集卷第十二・恋歌二・七〇五〕

平安後期の例証として参考となるこの歌の場合、「人に心
を尽くす」とは、薄情な相手に対して無益にも（恋の）懊悩
の限りを尽くす我が心身のありようをいう。このような「人

に心を尽くす」前提が、「人に心を付く」つまり執心するこ
とにほかならない。

題しらず

西行法師

②おしなべてものを思^{おも}はぬ人^{ひと}にさへ心^こをつくる秋^{あき}の初風

〔新古今和歌集卷第四・秋歌上・二九九〕

宮河歌合・五一／西行法師家集・四七

この西行詠も時代が下る例ながら、頭尾を貫く措辞の緻密
さにもあらためて感心される一首である。頭句は「風」の縁
語として据えられているのであろう。即ち、風が吹いて押し
なびかすごとく「おしなべて」齊しく「人に」愁いすなわち
秋思の「心を付」ける「秋の初風」よ、と詠んでいる。初め
て秋風が吹くと誰しも物思いの限りを尽くすという、風靡の
意であらう。

③④に頭^{あたま}ではないけれど、古来、「心（思ひ）を付く
（ば）」と言^いひ掛^かける形^{かたち}で、「筑波嶺（筑波山）」に託^{たく}して恋^こを
詠^よむ方法^{かた}があ^あった。⁽²¹⁾

（題しらず）

源重之

筑波山^{つくはた}は山^{やま}しげ山^{やま}しげ、れど思^{おも}ひ入^いるにはさ^さはらざりけ
り

又^{また}かよふ人^{ひと}ありける女^{むすめ}のもとにつかはしける

大中臣能宣朝臣

⑤われならぬ人^{ひと}に心^こをつくすば山^{やま}したにかよはん道^{みち}だにやな
き

〔新古今和歌集卷第十一・恋歌一・一〇二三〜一〇一四〕

①つれもなき人に心をつくばねのみねのあさざりはれずこそ思へ

〔古今和歌六帖第一・天・きり・六四一〕

「我ならぬ人」——自分とは違う他の男に想いを寄せている女を「筑波山」に喩えながら、別途、せめて密かにその山へ通う道筋は無いものかと訴えかける能宣の歌②。一方、つれない相手への恋着から、「筑波嶺」の山容が見えないように立ちこめている「朝霧」のごとく心が晴れない鬱屈を詠んだ古歌③。

（題しらず）

よみ人しらず

④音にきく人^④に心をつくばねの見ねと恋しき君にもある哉

〔拾遺和歌集卷第十一恋歌一・六二七〕

⑤おとにきく人^⑤に心をつくばねのみねどもおもふおもはんや君

〔古今和歌六帖第五・雑思・いひはじむ・二五四五〕

また、類歌とおぼしきこちらの二首では、執心の意を掛けるにとどまらず、全く一致する上句「音に聞く人に心をつくばねの」までが序をなして、続く下句に同音で「つくばねの嶺」から「見ね（ど）」へと導いていくところから、頭句「音に聞く」との脈絡もつけられていることがわかる。さきの解釈で傍点を施したごとく、おそらく④の「筑波嶺のみなね」にも「見ね」の意がかすかにかかっているにちがいない。

「ものゆかしがり」する心

い。

こうして、「人に心をつく（す）」とは、和歌的修辭の支えある表現であることが確認されるであろう。特に、世評に耳にするだけでまだ見ぬ「君」への切実な恋情を詠んだ⑥⑦の二首など、貴賤を問わず一般に⑧「男といふものは、あやしきだに（身の程も）知らず、人に心を付くる（わざ）なめりかし」と作る流布本本文を支える証歌として掲げててもよからうか。

ただ、狭衣物語の該当箇所「つくばね（筑波山）」の語が見えないことを慮れば、次に掲げる歌のほうがより妥当であるかもしれない。

はじめて人につかはしける

（よみ人しらず）

人づてにいふ事の中よりぞ思ひつくばの山は見えける

る

はつかに人を見てつかはしける

つらゆき

⑨たよりにもあらぬ思のあやしきは心を人につくるなりけり

〔後撰和歌集卷第十・恋二・六八六〜六八七〕

題しらず

もとかた

⑩たよりにもあらぬおもひのあやしきは心を人につくるなりけり

〔古今和歌集卷第十一・恋歌一・四八〇〕

後撰集で、「思ひつく（ばの山）」を詠みこんだ「よみ人し

らず」の一首に並んで配され、「はつかに人を見てつかはしける」という詞書を伴った貫之の作^㉔。これは集付からもわかるとおり、古今集「題しらず」の一首で、作者を元方として収められている。^㉕^㉖は、古今後撰の重複歌というより、同一歌ながら別伝をもつ一首だと考えられる。

もつとも、事こまかに言えば、第四句を「心を人に」と作る歌句本文に対し、狭衣物語では「人に心を（二）つくす／（三）つくる」に作っているという相違がある。対象語の位置が入れ替わっているのである。これについては当然、和歌と物語それぞれの文脈も顧慮すべきだけれど、そのまゝに迂遠ながら、次の例歌を採りあげたい。

かくこひんものとしりせハ人めみる人ひとに心をつくる身な

れは

はつかしはつかし人にこゝろをつけしよりみそかなからに恋わたるかな

〔好忠集・五五九〜五六〇、源順「安積山難波津」沓冠歌（宮内庁書陵部蔵伝冷泉為相筆本。笠間書院版影印に拠り私に翻字した。）〕

「安積山難波津」の沓冠歌三十一首のうち末尾の二首として詠み配された、源順の作歌である。前のほうの「一首は『こんなに恋い焦あせられるものとわかっていたならば、恋などしない方がよかつたのに。しかし一目見た人ひとに心を寄せてしまふ我が身なので、恋心は抑えられない』^㉗の意であろう」

か。沓冠という制約もあって、句の上下の繋がりにいささか言葉の足らぬ反実仮想といった印象を受ける。後のほうは、副用語「はつか（に）」「みそか（に）」と同音の「廿日」「卅日」という日付をも配する趣向を凝らし、ほんの「一瞬」「人に心を付け」てからずうつと密かに恋い続けるのだなあ、と詠みなした一首である。

ほんの一瞥で相手に魅了されてしまう現実の身。始まりの一瞬と恋の持続との対照。ともに（恋）心の神秘を詠んでいるこのどちらにも、本歌として^㉘（^㉙）が想定されるのではあるまいか。「心を人につくるなりけり」と詠み下された発見こそ、趣向の要であろう。それを、沓冠の詠作者が「人に心をつくる」と措辞を入れかえ調えたと考えるのである。元方の作が、詞書を伴った貫之の作として後撰集に再び撰取されている事実から容易に導かれる帰結かと思われる。周知のごとく源順は、梨壺の五人のひとりであった。

古今後撰に収める歌句「心を人に（つくる）」から「人に心をつくる」への改変は、対象語の単なる入れ替えの次元にとどまらない。元方や貫之の詠んだ歌句の場合には、「たよにもあらぬ思」つまり「心」のほうに重心が置かれているのに対し、順の詠歌の場合には「はつかに」「一目見る人」のほうに重点が移っているのである。

とすれば、「ひとついもせ」として生い育った源氏宮を密かに慕う主人公の忍ぶ恋が作品を駆動していく狭衣物語の設

定において、順の杳冠歌二首と併せて㉔も、きわめて密接に関わっているものと把握されよう。狭衣物語の異文のうち、「わざ」を修飾する場合だけでなく、「もの」を修飾する場合についても同断であろう。

元方貫之が詠じた「心を人につくる」「思のあやしき」あらゆるの発見から、順が詠みなした「人に心をつくる身」の認識へ――

(一) おとこといふものハあやしきだにいかなるもひとわたりものゆかしがりせぬものハなきよのさがなりける

〔伝慈鎮筆本〕

(二) おとこといふものハあやしきだに身のほどもしらず人にこゝろをつくすわざなりかし〔伝為明筆本〕

(三) をとこといふものハあやしきだにミのほどもしらず人にこゝろをつくるわざなんめりかし〔伝清範本〕

(四) おとこといふ物はあやしきだに身の程しらすあらぬおもひをつくる。とかや〔深川本〕

こうして狭衣物語の本文を並べてみると、さらに注意すべきもう一つの措辞に気づかされよう。圏点を施したごとく、㉔(㉕)に配された形容詞が、物語本文にも共通して用いられているのである。

もちろん、「身のほど」の卑賤をいう物語本文と、恋心の不思議をいう和歌本文とでは、「あやしき」の表わす意が異なる。しかし、ツテや抛り所でもない恋の情熱の「火」が

「点く」ごとく、自分の「思ひ」が「心を人に付くる」にとどまらず我が恋「心を人に告ぐる」不可思議を初めて知ったという驚きの体で詠じた㉔(㉕)は、源氏宮に対する主人公の切実な心情をいわば結晶した趣をも有しているのではないか。「人に心を付く」恋着と、「人に心を告ぐ」告白と――

いかにせぬいはぬ色なる花なればこゝろ
のうちをしる人ハなし〔伝慈鎮筆本狭衣卷一3オ〕

作品冒頭で読み手に示されるこの独白は、「人に心をつけてしまった男の衷心を如実に象っている。「われハわれと」(伝慈鎮筆本狭衣卷一3ウ)の恋着をたやすくは告げられぬ心境なのである。かくして、「たよりにもあらぬ思ひのあやしきは心を人につくるなりけり」の一首を、狭衣物語の引歌としてあらたに付け加えてもよいであろう。「一目見る人に心」とらわれる男の身を詠じた順の歌と違って、この物語では、幼少時からほんの少しの隔てもなく生い育った相手に執心する男を探りあげるといふ新たな工夫も凝らされているのであった。

おわりに――「あらぬ思ひ」存疑

伝慈鎮筆本卷一に遺された「ものゆかしがり」という語を端緒に、狭衣物語の設定・異文・引歌をめぐって考察を試みた。いささか迂遠な行論となったけれど、本稿の要点を簡条

書きすれば、以下のとおりである。

1. 情意形容詞「ものゆかし」とその派生語が表わすのは、感覚性官能性豊かな対象に向けられた強い好奇心である。この接頭辞モノは、通説のごとく漠然性を表わすのではなく、対象の存在を語形として明示することで、当面する事物事象への強い志向を表わしている。

2. 「ものこのみ」と「ものゆかしがり」との比較から、前者が才藝への深い関心を表わすのに対して、後者は欲動に駆り立てられた好奇心を表わすという、いわば深淺のちがいが対照される。

3. 「男といふものはあやしきだに身の程も知らず人に心をつくるわざなめりかし」と一般論を繰り広げる流布本狭衣巻一の本文には、古今後撰に収める「たよりにもあらぬ思ひのあやしきは心を人につくるなりけり」の一首全体が引歌として踏まえられている。

現在、いわゆる流布本をはじめ深川本や内閣文庫本を底本とする活字テキストで読まれることが通例となっている狭衣物語であるが、これらの本文が作品としてのあるべき姿を保ち伝えているものかどうか、やはりなお、夥しい異文をも顧みながら、精細に吟味していく必要があるように思う。

これまで特に注目されてはいない「あらぬ思ひ」という語もその一例である。

おとこといふ物はあやしきたに身の程しらすあらぬおも

ひをつくる。とかや〔深川本狭衣巻一8オ〜8ウ〕

「あらぬ思ひを付くる」とは、和歌的修辭「人に心を付くる」のヴァリエーションとして、より一層洗練された措辭と受けとめられようか。現在、次のような語釈や現代語訳が施されている。

思ひもよらぬ恋をするものとかいう。

〔日本古典文学大系79三五頁頭注二四

（岩波書店、昭和四十年八月）

男性というものは、身分の低い者でさえ、身分もわきまえずに、不都合な懸想心を抱くものとかいうことだ。

〔新編日本古典文学全集29二六頁現代語訳

（小学館、一九九九年十一月）

「思いもよらぬ恋」「不都合な懸想心」とは源氏宮に対する主人公の恋着をさす。周知のごとく、「た、ふたハよりつゆはかりへたつることなくおいたち」周囲の人々からも「ひとついもせ」（以上、伝慈鎮筆本巻一3ウ）と見られてはいるものの兄妹関係にないこの二人の男女について、語り手は、いまはしめたることにハあらねとなをよの中さらてもありぬへかりける事をあまりによりつすくれ給へる女の御あたりハマ事の御せうとならさらんハいミしようともむつまじうこそおほしたてきこゑ給まじかりけれ

〔伝慈鎮筆本狭衣巻一4オ〜4ウ〕

と口をさし夾んでいた。「よろづすくれ給へる女」に好意を

寄せる主人公は「まことの御せうとならざらん」男に教えらるる人物として設定されている。二人には、血縁による禁忌は初めから存在しない。

にもかかわらず、右の口上に続けて、同母異母のちがいを超えた女きょうだいへの懸想の先例として、在五中将はじめ「仲澄の侍従・宰相中将などのためしども」に言及していく叙述をもつような本文が重視されている。巻一を読み進めていくと、実際、主人公が源氏宮に対して直に思いを告白する作中歌、

よしさらハむかしのあとをたつねミン

われのミまとふこひのやまへか〔伝慈鎮筆本巻一30オ〕に至る場面の小道具として「在五中将のにき」(伝慈鎮筆本巻一29ウ)を画いた絵が持ち出されている。伝慈鎮筆本においては「恋の山辺」に「まどふ」先蹤として、「仲澄の侍従」などとの照応も観て取れるこの事實は、しかしながら、却って顕わに過ぎるようにも思われる。むしろ「在五中将(のにき)」の名が見える展開を先取りして容喙した注文のごとき印象をおおえるのである。本稿で採りあげた、洞院上・今姫君母代ふたりの偏頗な「物好み」としての設定のありようなど思い合わせられようか。あるいは、作品冒頭において、書き出しの時日設定をめぐる本文異同ふくめ、「光源氏」の名にふれぬ伝本の存在にも、あらためて思いわたされるのである。

つまり、後文に見える、同母異母の別なく「いもうと」への恋を想起させる「在五中将」や「仲澄の侍従」といった「昔の跡」をあえて払拭してみれば、狭衣物語に登場する二人の男女が「ひとついもせ」に擬せられる間柄に在るという素朴な設定が浮かびあがって来る。本稿が、狭衣物語の骨髄として源氏物語玉蔓十帖とその達成を重視する所以である。源氏宮と主人公に禁忌が存しないのだから、彼の懸想を「不都合な」と解する余地は無くなってしまうであろう。ならば、「思いもよらぬ」とする別解のほうがふさわしいということとなるのだろうか。

かくしてこの「あらぬ思ひ」についても、「ものゆかしがり」同様あらためて用語例の検討をへた上で、その解釈の当否を定める必要があるかと思う。

伝本の異同状況をあたうかぎり見たしながら一語一語の表わす意味を帰納し確定していく作業は、作品解釈にとって不可欠の手續にちがいない。校本はじめ諸本集成や注解など、先人の業績を踏まえながら述べ来たった本稿の疎略な試みが、注釈というこの地道な作業を少しでも進める一歩となることを切に願う。

— 令和元年秋分 —

注

(1) 以下、狭衣物語本文の引用は『狭衣物語諸本集成』に基づき、丁数を掲げてその所在を示す。引用に際して、異文との対校の便宜上ナカゲ口・傍線等附すとともに、文意の疏通を図るべく私に清濁を分かち句読を施しなどする。

(2) 吉田幸一編『狭衣物語諸本集成 第三卷 伝慈鎮筆本』（笠間書院、一九五五年十月）および『同 第五卷 紅梅文庫本』（一九九七年九月）「解説」参照。

(3) 元和古活字版（卷第三之中）本文も、「ものまねび」「實ならぬこと」も、唯片端いでくれば、實しう言ひなす人多かる世のさが、「折々の立ち聞き・垣間見」などと作り、ほほ同じい。日本古典全書本下五六―五七頁参照。

(4) 類義関係をなす「あながちに」「しひて」「わりなし」それぞれを区別すれば、オノ（己）の母音交代形アナを析出できるところから「あながち（に）」が自分本位の意を表わすのに対して、動詞「強ふ」の連用形から派生した「しひて」は相手への強制を表わし、「わりなし」は理の無い情態をいう。

(5) 源氏物語本文の引用は『源氏物語大成校異篇』に拠り、巻名と頁数を示す。ただし歴史的仮名遣いに基づき、適宜かなを漢字に漢字をかんに改めた。また文意の疏通を図るべく、括弧内に主語等を補ない示した。

(6) 注4参照。
 (7) 形容詞「ゆかし」の語基になった動詞について阪倉篤義博士は、次のように説いておられる。

「……「やさし」の語基になった「瘦す」などと同様に、この場合の「行く」は、強い精神的な志向を内に持った（具体的な 動作として）言われているのである。

「ゆかし」すなわち「行きたくなるさま」というのは、現在はその行っていない状態にあるために、その対象に近づいて、よりよく知りたいという憧れの気持をいさぐ状態のことである。〔増補 日

本語の語源〕平凡社ライブラリー729（二〇一一年三月）一六〇頁）ちなみに、源氏物語では、まだ中将の頃の光源氏を「まめならぬ御心は」（空蟬八八頁）などと叙している。

(8) 「もの」「こと」を比較対照しながら語彙（史）論の観点から包括的に考察せられた、東辻保和「もの語彙こと語彙の國語史的研究」汲古書院（一九九七年九月）をいわば先駆として、近年においても例えば、次のような考説が具わる。

接頭辞「もの」を冠することで、「なんとなく」「漠然と」そのような感情であることを示す。情意的「もの」形容詞の基本的意味は、その漠然性であると考えられる。〔本廣陽子「もの」形容詞の意味と用法の発展―源氏物語の果たした役割〕〔国語国文〕第七十七巻第六号、京都大学文学部国語学国文学研究室、平成二十年六月）注19参照。

(9) 三巻本枕草子「いみじう心づきなきもの」の段には、「やんごとなからずとも、若きをのこなどのゆかしがるをも引き寄せよかし」と、接頭辞を伴なわぬ動詞の形に作る。後述する本稿第六節参照。

(11) 観智院本類聚名義抄には、次のような項目記載がある。

観（一官 ミル ノソム……又ノ貫 シメス ミモノ）〔仏中42才〕
 歎歎（呼官又 ヨロコフ 權同樂、ミケニス 禾火ン）〔僧中26才〕
 歎（正坎）

〔以上、新天理図書館善本叢書本に拠る。〕
 〔内は割注。〕

(12) 新潮日本古典集成本第七卷六一頁頭注一〇。

(13) 日本古典文学全集本(5)二二頁頭注二。

(14) 校注古典叢書本(五)一六頁頭注3。

(15) 「このみ」とあった原態が、例えば連綿の誤伝から「こ能み↓う羅み」をへて「うらみ」に変じた過程などが考えられる。

(16) ちなみに、神戸松蔭狭衣研究会（片岡利博ほか五氏）〔調査報告〕

『狭衣物語諸本集成第三卷 伝慈鎮筆本』翻刻本文補正」(『文林』第四十五号、神戸松蔭女子学院大学国文学研究室、二〇一一年三月)では、「諸本集成」の翻刻が、意が通じるかどうかということに斟酌しない翻刻であったということ」に注意を促している。

(17) 注2におなじ。

(18) 管見の限り、次のような語義説明をする辞書は貴重である。

ものゆかしが・る【物ゆかしがる】(他ラ四)〔がる〕は接尾辞(もの)をしようと、そのことをしたい気持ちにかられる。「御供に我も我もとーりて、まうのほらまほしがれど」(源・若菜・下) 〔因〕

ものゆかしげ【物ゆかしげ】(形動ナリ)物事をしたそうな様子。

「共に行く人々も、いとみじくーなる(人)は、いとほしけれど」

〔更級〕四(佐伯梅友・馬淵和夫編『古語辞典』講談社学術文庫366

(昭和五十四年三月) 八七四頁)

傍線を施した「そのことを」「物事を」のごとく、対象の存在を明示していることがわかる。ちなみに大野晋編『古典基礎語辞典』には、モノについて「古い時代の基本的意味は「変えることができない、不可変のこと」であった。」と概括した上で、次のように解説する。

モノアハレ、モノガナシ、モノサビシなどのモノは「なんとなく」と訳されているが、それは誤りである。「……中略……」モノの意はこのように「自分にはなんとも仕方のない」なりゆきを表している。「もの【物・者】名ノ終助」の項『古典基礎語辞典』二二〇七頁(角川学芸出版、二〇一一年十月)

大野晋「モノとは何か―ものがたり、ものあはれの意味―」(『語学と文学の間』岩波現代文庫、二〇〇六年二月)に詳しく述べられる。「ものゆかし」を基とする一連の用言に冠せられた接頭辞モノを捉え直そうとする本稿にとって、いずれも極めて示唆に富む。あるいは(モノ形容詞)と一括して把握すべきでないのかもしれない。注19をも参照。

(19) 接頭辞にとどまらず、形容詞の対象語となる名詞の場合についても再

「ものゆかしがり」する心

検討すべき余地があるかと思ふ。

山里はものわびしきことこそあれ世の憂きよりは住みよかりけり

〔古今和歌集卷第十八・雑歌下・九四四〕新撰和歌集卷第四・恋雜・

二五三、第二句「ものさびしかる」／和漢朗詠集卷下・山家・

五六三、第二句「ものさびしかる」／正保版本歌仙家集本小町

集・一〇〕

都へと思ふものかなしきは帰らぬ人のあればなりけり

〔土左日記十一月廿七日条〕

これら両例のうち、特に後者について詳説する次の釈はすこぶる重要である。「ものわびしき」と詠む前歌にも、該当する形容詞に読み換えて準用できるかと思う。

「もの悲しきは」は、漠然と「何となく悲しいのは」と訳しやすいくところであるが、それでは意味をなさない。悲しみの度合がはなはだしく薄弱となるからである。もちろん、なぜ悲しいと始めからハッキリ意識しているわけではないが、何かにつけてむやみに悲しいのである。「もの」には一定していないが格別に強調する意味がある。〔萩谷 朴「土佐日記全注釈」角川書店(昭和四十二年八月初版) 九五頁)

「何かにつけてむやみに」とは、漠然あるいは漠然の域にとどまらない。むしろ、対象をそれと、個別に指示できぬ「不定性」を介し、普遍性。にまで行き届いてはないか。「一定していないが格別に強調する意味がある」とはこの謂ではないか。右に掲げた土左日記の歌が、第二三句「思フ心ノワビシキハ」(今昔物語集卷廿四第四十三語)「思ふにつけて悲しきは」(宇治拾遺物語卷下・古本説話集卷上第四十三語)などと「もの」を伴なわぬ形で伝わっているのも、後世、このニュアンスが不分明となった結果であるように思われる。

本稿第二節所引源氏物語野分卷の一節「中将、夜もすがら荒き風の音にも、すずるにもあはれなり。」においても、「すずるに」が漠然や漠然を表わしており、「ものあはれなり」の接頭辞モノはやはり不定を介

して普遍を表わしているものと考えられよう。

ちなみに夙く、大伴家持は「春儲而物悲尔」(四一四)「春野尔霞多奈毗伎宇良悲」(四二九〇)「宇良々々尔……情悲毛比登里志於母倍婆」(四二九二)と、春愁の「悲」しさを繊細に詠み分けていた。この歌々が万葉集巻第十九の頭尾に配されていることも興味深い。

- (20) 『深川本狭衣とその研究』古典文庫刊(私家版「古典聚英」別冊、昭和五十七年十二月)に拠る。

- (21) 玄玉和歌集巻第五・時節歌下・三九六には「(初秋の心をよませ給ける) 円位法師」という詞書のもと、第四句「心をつくす」に作る。「心をつくす」と「心をつくる」の本文異同の一例として注意される。

- (22) 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』笠間書院(一九九九年六月)、工藤重矩校注『後撰和歌集』三三六頁補注776(和泉古典叢書3、一九九二年九月)参照。

- (23) 後撰和歌集総索引に拠れば、二荒山本649第三句「わひしきは」、片仮名本694第三四句「ワヒシキハ人ニ心ヲツクルナリケリ」と作る。日本大学総合図書館蔵藤原為相筆本天福二年本を底本とする笠間叢書版『後撰和歌集』687番の歌にも、以下のように注記する。

作者、荒清堀ナシ。三句、荒片保「わひしきは」。四句、片「人ニ心ヲ」。〔笠間叢書12一六〇頁頭注(昭和六十三年五月)〕

- (24) 伝為相筆本を底本に採用した、川村晃生・金子英世編『曾祢好忠集注解』では、「初句を「はつかにし」の誤写と考えて訳出している(三弥井書房、四六六頁、平成二十三年十一月)。が、いわゆる承空本私家集のうち片仮名書き『曾祢好忠集』の書記様態を顧慮すれば、「二モ」を「シニ」と誤った蓋然性も加えられるであろう。以下、参考までに承空本・資経本それぞれの歌句本文を私に翻字して掲げる。

カクコヒムモノトシリセハ人メモル

人ニ心ヲツクルミナレハ

イツカシニ人ニ心ヲツケシヨリ

ミソカナカラニコヒワタルカナ

〔承空本曾禰好忠集・四三ウ〕

〔冷泉家時雨亭叢書第七十一巻承空本私家集下〕
かくこひんものとしりせは人めもる

人に心を用くるミナレハ

いつかしに人に心を用けしより

みそかなからにこひわたるかな

〔資経本曾禰好忠集・六八オ〕

- (冷泉家時雨亭叢書第六十七巻資経本私家集三) 一首目の腰句「一目見る」を「人メモル/人めもる」と記しているところから「人目もる」と解し書写されていたこと、あるいは、二首目の初句「はつか」とあるべき箇所が字形の混同から夙くに「ハ↓い」と誤って伝わっていたことなど、推察される。

- (25) 和歌文学大系54『中古歌仙集(一)』二七九頁552補注(明治書院、平成十六年十月)参照。なお夙く、上句を次のように通釈する向きもある。

▽こんなにあなが私を恋していると知ったならば、私は、一目見るとその人に心を寄せるたちなので、すぐあなたを恋したに違いない。(日本古典文学大系80『平安鎌倉私家集』一二六頁559頭注(岩波書店、昭和三十九年九月))

- (26) 和歌文学大系54一〇〇頁脚注には「かく恋ひん」の歌の下旬の「参考」として、古今集に収める元方の恋歌のほうを掲げる。

- (27) 「異文の総体を掴む」ことをめざす片岡利博『異文の愉悦 狭衣物語本文研究』(笠間書院、二〇一三年十月)が具わる。

- (28) 内閣文庫本を底本とする日本古典文学大系79三頁による。深川本を底本として内閣文庫本等との校合によって本文を作成する新編日本古典文学全集29も、この一節をふくむ「底本では脱落」している箇所を「内閣文庫本により補」なっている(以上、同書二〇頁頭注三)。なお、「宰相中将」を「在(五)中将」からの転訛本文と捉える後藤康文「もうひとりの薫」(『狭衣物語論考 本文・和歌・物語史』笠間書院、二〇一一年十一月)『語文研究』第六十八号、九州大学国語国文学会、平成元年

十二月初出)がある。が、「宰相中将」はむしろ本のまま、源氏物語藤袴巻における夕霧をさすと考える視座に本稿は立つ。注30参照。

(29) 森下純昭『狭衣物語』冒頭部分の人名引用をめぐって(『岐阜大学国語国文学』第二十七号、岐阜大学教育学部国語教育講座、二〇〇〇年三月)にふれるところがある。

(30) 西「玉鬘たまむすび十帖と伊勢物語四十九段―「いもうとむつび」の物語史―(『文学史研究』第二十九号、大阪市立大学文学部国語国文学研究室文学史研究会、一九八八年十二月)参照。なお、作中人物に一貫する歌語の脈絡から、旧稿で用いた「玉鬘」はすべて「玉蔓」の表記に訂すべきものと考えている。

(31) 「あらぬ思ひ」に関する別稿を用意している。